

岸良の ナゴシドン



ナゴシドンは、全国的に行われている「夏越祭」が岸良の風土の中で変化して伝えられてきたもので、元々6月ごろに行われていましたが、現在は毎年お盆の頃に行われます。

平田神社の神舞奉納は、町の無形民俗文化財に指定されています。

ナゴシドンでは本来、祝詞を捧げた後、8つの神舞を奉納していましたが、担い手不足などにより、今は3種類の神舞しか残っていないため、最近では、全国的にも有名な「浦安の舞」を併せて奉納しています。

ナゴシドンの

神舞奉納

今回は3つの舞を奉納しました。まず1つ目の「浦安の舞」を奉納したのは、山口県在住の江原千花^{ちか}さん。江原さんは、ナゴシドンの舞手を募集していることを聞き、自ら志願して舞手となりました。

奉納を終えた後は、「波の音を聞きながらの奉納は、胸に迫るものがあった。また機会があれば参加したい。」と話していました。

2つ目の「薙刀舞」^{なぎなた}を奉納したのは、岸良地区に住む榮倉孝行さん。太鼓は五反田修さんが務めました。

「岸良が好きだから、この伝統を繋いでいきたい」と話す榮倉さん。薙刀を用いた力強い舞を奉納しました。



3つ目の「山の神舞」を奉納したのは、鹿屋工業高校1年生の松永太心^{たいしん}さん。太鼓は妹の紗夏^{さなみ}心さんが務めました。

奉納の前後も終始仲のよい様子の2人は、息の合った舞を披露しました。今回が初めての参加となった紗夏心さんは、また参加したいと話していました。

ナゴシドンの

茅縄くぐり

神舞を奉納し、五穀豊穡・地域安泰を祈ったあとは、参加者・観覧者全員で茅縄^{ちなわ}くぐりを行います。

しめ縄を四角く張り、その下を3周半くぐることで、これまでの半年の穢れを清め、その後半年の無病息災を祈ります。

この日も、大人から赤ちゃんまでたくさんの方が、縄をくぐり、無病息災を祈願していました。



▲茅縄をくぐっている様子

担い手が不足し、一時は存続の危機に陥ったナゴシドンは、時代に合わせ、少しずつ形を変えながら、それを支える地域の方々と、若き担い手たちによって受け継がれています。

